

個々人の意識や行動が「地域」の特性に規定されるものであるととらえたとき、時代が変容していくという実感、もしくは予感を「地域」のなかで見出すことは、「地域」と人々の関係を検討する格好の指標となる。本研究は、いわゆる「転換期」とされる時代において、「地域」における人々の暮らしの実態のなかでは、何が時代変容の契機と意識され、人々のどのような思考や活動が時代の変容を表してきたのかということ、近世から近代の連続性のなかで提示しようとするものである。地域史研究における作業概念としての「地域」は、そこがまさに歴史が生み出される場所であるという見通しのもと、既成の時代区分や空間区分の制約を受けずに設定される性格のものである。本研究では、その「地域」に生きる人々が、「世界」をどのように認識し、その上で行われたさまざまな営為によって、「地域」がいかに変容し、再編されていったのか、ということについて解明することを目的としている。

「地域」に生きる人々の「世界」、そして時代変容意識を明らかにするため、本研究では分析の基軸として、東方正教（ハリストス正教会）の受容のあり方に着目した。幕末の函館を窓口として流入した東方正教は、通称ロシア正教とも呼ばれる。明治初年に洗礼を受け、その後伝教を担った旧仙台藩士族を中心とする人々を、本研究では「士族ハリストアニン」と表現するが、彼らの活動によって、東北地方各地に教会が成立、多くの信徒を得るに至った。この東方正教は、一八世紀後半からの、蝦夷地、環オホーツク海、その後背に広がるロシアへと続く、北方社会への関心によって形作られたつながりを読み解く大きな指標である。以上の問題意識と目的に基づき、本研究では以下の内容を示した。

第一章「個別教会の成立と展開」では、個別教会の形成過程を、ひと・金銭収支・組織の三つの視点から検討した。士族ハリストアニンらが中心となって設立した教会の多くは、藩政期以来の重層的な人間関係が構築されているなかで成立し、地域の指導者が藩政期より培ってきた、新知識の導入や人材育成の土壌の上で展開したことを指摘した（第一節）。しかし教会が成立したといっても、会堂を正教の祈りの場に相応しい環境にするには時間と困難がともなった。そのなかで日曜日ごとの礼拝や復活祭などの祝祭の実施は、会外とは異なる暦や、違う時の刻み方のなかで生きることの、鮮烈な表明となった（第二節）。そして旧仙台藩陪臣によって結成された高清水頭栄教会においては、「互援社」という相互扶助組織が結成・運営され、経済的基盤の確立を目指すなど、教会の組織としての充実を図る活動が熱心に行われていた様子を取り上げた。旧陪臣の信徒らにとって正教の信仰とは、町の碩学と旧領主のお墨付きを得た新たな学問の場である上に、「家中」という枠組みを失った時に、上から与えられた新たなコミュニティであり、教会資産の確立は、このコミュニティの保持を目的とするものであったことを指摘した（第三節）。

第二章「伝教区の形成と機能」では、揺籃期の正教会にあって、個々の教会では充足させることのできない活動を補うために、近隣の教会同士が経済的・人的な面で連携・補完し合う「伝教区」というシステムが作り出されたが、それを最も早くに、有効に機能させた伝教区頭栄会に着目し、その形成の意義と機能について明らかにした。頭栄会の中核で

あった佐沼顕栄教会は、他の多くの教会が士族層を中心に構成されたのとは異なり、初期信徒の多くが商人であったことから、司祭の生活費を支える経済力を有し、司祭を常駐させたほか、「地方会議」を開催し、顕栄会における事情や解決策を発信することで、正教会全体が共有できる有益な情報にしようとの意図があった（第一節）。また、顕栄会周辺では、教会資本の確立や、教会組織と連動した商業・貿易の提案が活発になされた。士族ハリストアニンらの熱烈な伝教活動が、商業を志向する信徒らに届いたとき、その伝教活動を支える経済的基盤の構築と、それを可能にする産業の活性化、その活性化をもたらす地域の文明化の必要性という形で受容されたことが指摘できる（第二節）。

第三章「伝教の主体と受容者」では、伝教者と受容者双方の関係に着目した。故郷において開始された士族ハリストアニンの伝教により、血縁者で構成された教会が成立するが、そのような教会は、血縁者以外の人々を取り込むのが難しく、宿駅の中心地に血縁とは関係なく成立した教会に、次第に吸収されていく状況を明らかにした（第一節）。その後、士族ハリストアニンらの伝教活動は、全国に拡大していくが、多様な風土や生活、産業などに触れ、学問としての正教という形だけではなく、さまざまな人々の暮らしのなかに定着する正教の必要性に気づいていったこと、そして時にはプロテスタント諸派と競合するなかで、正教を客観視し、その特質を改めて認識する機会を得たことを確認した（第二節）。さらに、北海道における教導職による布教活動や説教の内容の検討を通じて、明治初期における「教え」の意義を考え、さらには教導職にとって東方正教の存在が脅威に映っていたことを明らかにした（第三節）。

第四章は「士族ハリストアニンの背景」である。藩政期、彼らの多くは地方知行制のもと、村に給地を持ち、場合によっては村で生活をしていた層であった。彼らは支配者としての立場、そして知識人として村落に知的営為をもたらす役割を強く意識していたが、その給地において展開する日常と、そこにおける知的世界への親昵性が、東方正教受容の素地となり、さらにはそこで涵養され、彼らの血肉となった知的営為のパターンが、ハリストス正教会の展開のなかで、伝教の方法やその内容を強く規定したことを指摘した（第一節）。旧八戸藩領周辺地域における士族らは、自らの身分や立場の動揺を危機ととらえ、その「土芥」に等しくなった士族としての名誉を、さまざまな形で回復しようと試みた。それは単に自分自身の矜持のためだけではなく、自分たちが指導層として復活することこそが、維新以降に出遅れた地域社会の発展を、少しでも挽回する手立てであるという意識によるものであり、ハリストス正教会の受容は、それを打破するための一つの選択肢として、受け止められていたことを指摘した（第二節）。

以上の内容によって示してきた「地域」とは、①東方正教が早い段階で受容され、②藩政期に地方知行制がしかれていた、という二つの点で特徴づけられる空間である。①について詳述すると、それは東方正教最初期の信徒の大部分を占めた旧仙台藩士族が、藩政期以来の人的ネットワークや、同じ知的世界を持つ人々への語りによって、伝教を行い得た空間であり、その士族ハリストアニンらと自意識や危機意識を共有した、維新時の敗北藩の士族らが暮らす空間として位置づけられる。加えて、東方正教が早い段階で受容されたのは、北方地域社会に接するこれらの地域社会において、ロシアへの関心が藩政期より高まっていたこと、また、一九世紀半ばの函館開港の影響を直接的に受けていたからにほかならない。この地域社会において、新たな知識や情報の流入窓口は、他の開港地や都市よ

りも、函館に向けられていたといえる。②については、地方知行制下の給人層が、城下を離れた藩内の村々に与えられた給地において、支配層として貢租を徴収するだけでなく、知識の集積主体としての役割を果たしてきた空間であり、給人個々人の問題に限らず、城下と村の関係、村内における人間関係、給人同士の行き来といったことが、地方知行という支配の在り方に規定されてきた空間であったといえることができる。

幕末から明治にかけての政治の大転換は、この地域社会においても、士族ハリスティアンたちにとっても、時代変容を感じずにはいられない衝撃であったことは疑いようもない。それに加えて、維新の敗北藩となったことが、屈辱の念と将来への閉塞感を彼らにもたらし、そのなかで、これらの事態が個々人の問題として強く認識されたのは、地方知行給人としての、地域社会における支配層、そしてそれに付随した知識層としての立場が根底から覆されるという事実と直面したことにある。それは、単に立場の問題だけではなく、暮らしの基盤が崩れるということの意味した。その事実と直面して、それらを挽回する手立てとして、新しい知識や情報を求めようとするのは、時代の不可抗力的な力によって、「周辺」に規定されようとしている人々が、「周辺」からの脱却を目指して取ろうとする行動の、普遍的な姿として位置付けられる。この地域社会の特質のなかでは、村における自己の基盤が失われたことに対して、時代の変容を読み取らざるを得なかった士族たちに、その姿を見出すことができる。

本研究で取り上げた「地域」においては、地域社会の展開を主体的に考える人々が、その精神的な拠りどころとして東方正教を受容し、それにともなう内的な価値の変容を、地域社会の場で実践しようとした。地域社会の問題を共有する以上、信仰の有無とは無関係に、会外の人々とも協調することができ、そのことが、地域社会の代表者として、ハリスティアンらが発言や主張することも可能にしたのである。地域社会のなかに個々人の問題を還元させ、「個」に帰結しない精神の在りようによって、その解決を図ろうとする、いわば「ゆるやかな近代化」を目指す地域社会、その実現こそ、ハリスティアンらが歩もうとした「近代」であったのではないかということ、本研究を通して展望することができる。